

「目の動き」で「意思」可視化

読売療育賞 西部島根医療福祉センター 最優秀

重症心身障害者施設で働く職員の優れた実践研究に贈られる「第15回読売療育賞」（読売光と愛の事業団主催）の最優秀賞に、西部島根医療福祉センター（江津市渡津町）が選ばれた。同センターの作業療法士引地晶久さん（34）は「重い障害のある人たちの言葉にならない思いを受け止め、できることを一緒に見つけていきたい」とさらなる実践を誓った。

（元永達夫）

重度障害者に視線入力装置

同センターは外来に加え、医療型障害児入所施設と療養介護事業所で約100人が利用している。今回は、引地さんたちが、脳の障害により意思疎通が困難な人たちの目の動きを、パソコンにつないだ視線入力装置を使って可視化する研究が評価された。

スタッフは日常、重症の入所者と目が合うことが少なく、こちらが見えているのか判断できないケースも多いという。そのため口元や指先などのわずかな反応で「見えている気がする」などと主観的にとらえるしかなかった。

そんな中、島根大総合理工学部で視線入力装置による重度障害者のコミュニケーション支援を研究してい

ると知り、2016年7月に伊藤史人助教の開く講習会に参加。市販のゲーム用機器をつないだパソコンで、視線をマウス代わりに画面を操作できることが分かった。

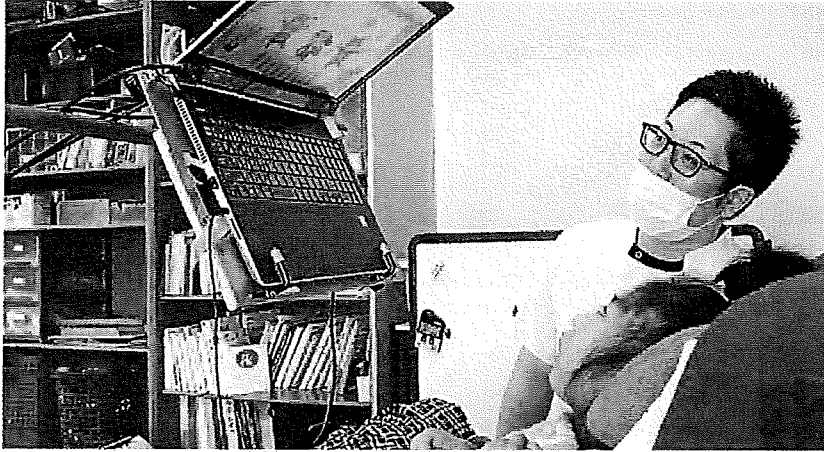
「これを入所者に使ってほしい」。すぐに伊藤助教をセンターに招き、視線入力を試してもらった。子どもたちが生き生きと遊び始めた。重度の入所者も画面上で動くキャラクターを目で追った。視線を動かすことで模様や音楽が発生するソフトを使ってもらうと、盛んに模様が浮かび、音が流れた。「見えていることが客観的に判明した」とその時の喜びをかみしめる。

さらに確証を高めようと、18年3月～19年6月に

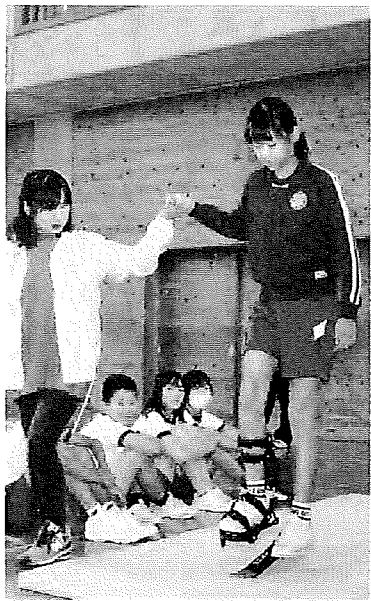
かけて、6～64歳の男女16人に入力装置で視線の動きを調査。ほぼ全員が画面を見て、キャラクターなどに視線を向けるなどの反応が確認された。

さらに視界や視線の動きに個人差が大きいことが判明。「入所者それぞれに見やすい位置がある」と情報をスタッフで共有し、支援に生かしている。さらに従来スタッフが決めていた日々の活動を、視線入力で選ぶケースも出てきた。画面に「お散歩」「お絵かき」といった写真を映し、入所者が見つめた方を採用する。

引地さんは「視線入力で症状の重い人も意思を示し、活動の幅を広げられる」と期待を込める。これからは先端技術と作業療法の連携で障害者の「わかる」「ことを見つけ、「できる」「ことを引き出したい」と意欲をみせた。



視線入力装置を使う入所者と引地さん（江津市で）＝引地さん提供



義足で歩く児童（出雲市で）